中年期における死の脅威に対するノスタルジアの緩衝効果の検討

単語完成課題を用いた死の概念の活性化測定を試み

○村上安壽子¹・工藤恵理子²

(東京女子大学現代教養学部²)

キーワード：ノスタルジア，Mortality Salience，死の思考の接近可能性

Nostalgia as a resource against existential threat in middle age

Yasuko MURAKAMI¹・Eriko KUDO²

(School of Arts and Sciences, Tokyo Woman's Christian University²)

Key Words: Nostalgia, Mortality Salience, DTA(Death-Thought Accessibility)

目 的

死は不可避で、いつ訪れるかわからないという認識は、本能的な生存欲求を持つ我々に恐怖を喚起させる(存在脅威)。しかし、存在脅威管理理論(Solomon *et al.*,1991)によれば、死の脅威が顕現化しても、人は人生に意味を与えることとなる「文化的に共有されている世界観」や自己評価の基準となる価値への適合感(「自尊心」)などを獲得・維持する心的防衛の働きにより、存在脅威を統制しようとする(Mortality Salience:MS 効果)と仮定され、現在まで多くの実証的証拠が示されてきた。一方、過去への感傷的な切望や懐かしむ感情とされるノスタルジアには、ポジティブ感情、自己概念の強化、社会的絆の強化、実存機能の4つの心的機能(Sedikides *et al.*,2004)があるが、この実存機能に注目した Routledge *et al.* (2008)は、青年期を対象にして、ノスタルジアが意味の生成のリソースとなるために、死の脅威の顕現化(MS 操作)によって失われる意味の概念に対して、新たな意味を提供するための3つの心的防衛に傾注するのを緩衝する効果があることを見出している。また、死の顕現化により死の思考の接近可能性は高まるが、ノスタルジアが死の顕現化による影響を緩衝するのであれば、死の思考に関するアクセシビリティを低減することを示した。

死に対する脅威は生涯に渡るが、従来の MS 研究の対象は青年期に限定されており、高齢者を対象としたものでは、MS 操作に対して実行機能の程度に応じて心的防衛が生じない(Maxfield *et al.*,2007;2011)ことが明らかにされているが、中年期の検討はされていない。そこで、中年期においても老年期と異なり青年期と同様に MS 効果、ノスタルジアの緩衝効果が生じ、MS 操作により生じる死の思考の接近可能性がノスタルジアの効果により緩衝されるかどうかを検討した。

方 法

参加者: 中年期(35歳～60歳未満) 男性 56名、女性 44名 計 100名 ($M=46.72$, $SD=5.6$)。対象年齢外、実験環境不備の11名を除外した89名のデータを用いた。**実験計画:** ノスタルジア(2: ノスタルジア有/無)×MS(2: MS 有/無)×性別(2: 男性/女性)の3要因実験参加者間計画。**手続き:** ①カバーストーリー「中年期の自己観」調査とし、操作前の自尊心、デモグラフィックな情報を尋ねた。②ノスタルジア想起条件「これまでの人生で最もノスタルジックに感じる出来事」、統制条件「先週日々の暮らしの中でよくある出来事」、各5分間で想起を求めた。続いて、MS 条件「自身の死について考えた時に感じる感情、死ぬ時に起こること」、統制条件「自身の歯の痛みについて考えた時に感じる感情、その時起こること」(Rosenblatt *et al.*,1989)を5分間で記述を求めた。③日本語版 PANAS(佐藤・安田,2001)、単語完成課題(語幹完成課題(Arndt *et al.*, 1997)をもとに、□の中に1文字を入れて死に関連した単語、あるいはニュートラルな単語の両方に作成可能な単語(例:そう□き,そう□き)を完成させる6問、ニュート

ラルな単語のみが作成可能な単語の完成を含む計36問)の課題を行った。続いて内集団ひいきなどの質問への回答も求めたが、本報告は単語完成課題の結果に絞って報告する。

結 果

ノスタルジア×MS×性別の3要因の分散分析の結果、性別の主効果のみ有意($F(1,81)=12.32, p<.001$)、男性($M=1.33$, $SD=1.03$)の方が女性($M=0.63$, $SD=0.73$)より死に関連した単語の完成数が多く、死の思考の接近可能性は高かったが、その他の主効果、交互作用効果はみられなかった($F_s<2.2, n.s.$)。

そこで、死の顕現化に伴う自死に関連した単語の活性化について仮定し、探索的な検討を実施した。従属変数は、「じさつ」「じけつ」「いしょ」の自死に関連した単語を作成した数を、各個人の作成した単語の総数で割った自死関連語生起率として、3要因の分散分析を実施した。性別の主効果が有意($F(1,81)=4.85, p<.05$)、男性($M=0.92$, $SD=1.42$)の方が女性($M=0.33$, $SD=0.92$)より自死に関連した単語の生起率が高く、自死に関連した概念が活性化され易かった。加えて MS×性別の交互作用効果が有意($F(1,81)=6.55, p<.01$)で、さらに下位検定を実施した。MS あり条件における性別の単純主効果が有意($F(1,81)=11.45, p=.001$)で、MS あり条件では男性の方($M=1.36$, $SD=1.52$)が女性($M=0.15$, $SD=0.67$)より自死関連語生起率は高く、自死に関連した概念が活性化され易かった。また、男性では MS の単純主効果が有意で($F(1,81)=7.16, p=.01$)、MS あり条件($M=1.36$, $SD=1.52$)の方が MS なし条件($M=0.44$, $SD=1.44$)より自死関連語生起率は高く、自死に関連した概念が活性化され易かった。

考 察

中年期のサンプルにおいて、死の脅威による死の概念の活性化の証拠は見いだされず、ノスタルジックに過去を想起することの緩衝効果も確認されなかったが、男性の方が女性よりも死の概念が活性化していた。この背景には、男性には死の意味が含まれた単語に回答することを躊躇しないが、女性は意図的に躊躇し回答を忌避した可能性が考えられる。したがって、参加者の意図を排除するために、潜在指標を用いて反応潜時を測定することが望ましいであろう。さらに、女性の方が介護等の経験から死を身近に感じており、死の概念の活性化を上手くコントロールすることが出来ている可能性も考えられる。また、男性では死の脅威の顕現化により、死に関連した概念の中でも特に自死に関連した概念が活性化されやすいことについて、その理由の検討が必要であろう。

主要な引用文献

Routledge, T., Arndt, J., Sedikides, C., & Wildschut, T., 2008, *JESP*, 44, 132-140.
Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T., 1991, *Handbook of social and clinical psychology: the health perspective*. NY: Pergamon Press. 21-40.